神奈川県現代俳句協会会報

第161号
令和5年9月発行

川崎句会吟行報告

加賀田せん翠　記

「馬場花木園で蓮の花を愛でる」

日　時　令和五年六月二十九日（木）
吟行地　馬場花木園（横浜市鶴見区）
句会場　鶴見公会堂
講　話　栗林浩先生（「小熊座」「遊牧」同人）
『想い出の俳人』

四年ぶりの川崎ブロックの吟行会は、まだ六月というのに三十二度という猛暑の中、四十名の参加があり、ありがとうございました。

花木園は蓮の花が咲き、凌霄花、桔梗、捩花、半夏生、萱草、うつぼ草、紫陽花と沢山の花が溢れ、蜻蛉や蝶が楽しそうに舞っていました。句会は嘱目二句出句、十三時開始。栗林先生の講話もあり、十六時過ぎまで楽しい一日を過ごしました。皆様のご協力に心より感謝致します。

馬場花木園の蓮池

川崎句会のみなさん

入賞者（一位～二十位まで）

農器具のしづかに置かれ半夏生　佐藤　久
白蓮や五次元あるといふ宇宙　杉　美春
竹林の黙打つごとく蚊を打てり　麻生　明
古民家は武士の骨格蘆青む　内藤ちよみ
泥に生き泥を突き抜け蓮の花　菅原　若水
どうみても饒舌すぎる凌霄花　加賀田せん翠
蓮咲いて真昼の浄土賜りぬ　川島由美子
蓮池を巡りて薄くなる記憶　植田いく子
今年竹向こうの空を軽くする　山田ひかる
蓮ひらくいくたび夫を励まして　栗林　浩
たましいを休ませに来る蓮の池　尾崎　竹詩
一日の恋とはゆかず野萱草　伊藤　眠
七変化ついに本音は吐かぬまま　長谷川昭放
たましひに彩色すれば花蓮　武良　竜彦
邪心なき葉裏を晒す白蓮　芳賀　陽子
そして全ては無かったかのよう蓮の花　三上　泉
沢桔梗奥のほうから揺れてみせ　斎藤佳代子
蓮の花ゆれて水面に風の道　坂　守
古老居て蓮の開花の音語る　三沢　容一
烏柄杓忘れて帰るサングラス　露木　君江

◎当日の講話の内容は本会報9ページに掲載

締切迫る！

第40回　神奈川県現代俳句協会俳句大会作品募集

●応募規定……二句千円をもって一組とする。応募は一人何組でも可。ただし、新作未発表作品に限る。
前書き、ルビは不可。
所定の投句用紙または二百字詰原稿用紙を使用し、住所・姓号を明記して下さい。
投句料は作品に同封のこと。

●送り先
〒233-0007　横浜市港南区大久保3-23-12
藤田裕哉方　大会投句係

●〆　切　令和5年9月30日（厳守）

祝　現代俳句協会評論賞　佳作

石川　夏山　さん

「河原枇杷男俳句における認識論と存在論」第43回現代俳句評論賞　佳作を受賞されました。おめでとうございます！

トピックス
川崎句会
吟行報告
諸家近詠
サミット短信
俳人交遊録
結社便り「波」
会員新刊案内
講話
「思い出の俳人」
新しい風
秋の一句

新会員紹介欄

青葦　富山ゆたか（波俳句会）

糸とんぼの浮力支へてゐる朝日
かの少女いつの間にやら藍浴衣
青葦に組して風のうねりけり

そよ風　式部　洋子（岩戸俳会・横須賀俳句協会）

そよ風が入学式についてくる
スイートピーおつかれさまのはしりがき
若き日の意気忘れまじ青岬

竹の春　神谷　純子（あかざ）

飛車抜きの負けぬ対局春満月
白靴のここから一線ひきにけり
いにしえの宿場の街や竹の春

諸家近詠（到着順）

青葉風　平山　圭子（海原）

水切りの巧みな少年夏の川
杖をつくリハビリの娘よ青葉風
同窓会まず乾杯のビールかな
白南風や検診無事に済ませたり

渡りゆく　平田　薫（つぐみ・海原）

なみなみと時間をはこぶ夏の蝶
右でなく左にまがる凌霄花
すいかずらこの世の橋を渡りゆく
思い出を途中で端折る瑠璃蜥蜴

鳥渡る　比留間加代（蛮）

長男の料理の手際夏休
遠く来て公園墓地や秋の雲
看板は「塩」の一文字鳥渡る
心経の文字の定まり蛍草

熱帯魚　星　由江（暖響）

筒鳥やめくりてゐたる開国史
少年の目差し強し凌霄花
あぢさゐや一途の思ひ色に変へ
もう一人の私に気付く熱帯魚

夏　藤方さくら（祭演）

あの夏は月見草だけありました
岩煙草水が退屈しているか
青柿のぽろぽろ落ちて心不全
八月十五日右も左も黙祷す

皺の手　平田　洋子（はるもにあ）

春浅し子は踏台を文机に
猫車伏せて置かるる炎暑かな
滑り台の下に母待つ黄落期
皺の手が皺の手を包み込む

月光　藤本　博夫（顔）

秋の波いまは足首濡らすだけ
月光や切り離された貨車一輛
隧道の闇のをちこち虫時雨
晩秋の鏡に吾を見る老爺

中村雨紅先生　早坂　澄子（無所属）

夕焼けや先生の歌鳴っている
入学すバケツの絵を貼りことば学
四月なり方丈記読みわかるだろ
梅雨の傘お借りしなくてお困り顔

ひしめく　寶子山京子（群青）

夕立が追ひかけてくる山間部
休戦ラインに触れてしまった糸蜻蛉
曇る日の未央柳を聞き齧る
細部まで星のひしめく星月夜

逃水　堀口みゆき（鷹）

街路樹の等間隔の寒さかな
逃水やJアラートがスマホより
ミサイルも黄砂も飛ばぬ日のひかり
地図に無き島の名あまた流し雛

サミット短信

今年度よりブロック・研究会制度の垣根を取り払い、独立した句会として運営することとなりました。

それに伴い各句会の名称を左記のように変更します。

会員はどの句会にも自由に参加できます。参加希望者は各句会の責任者にお問い合わせください。

（旧名称）		（新名称）
西部俳句研究会	↓	辻堂句会
横浜俳句研究会	↓	みなとみらい句会
横浜ブロック句会	↓	星川句会
川崎ブロック句会	↓	川崎句会
湘南サンシャイン句会	↓	湘南サンシャイン句会
西部ブロック丹沢句会	↓	丹沢句会
横浜南部句会	↓	磯子凪句会
夏雲句会	↓	インターネット句会
金八ＺＯＯＭ句会	↓	金八句会

辻堂句会

伊藤　梢　報

第二九九回　於・明治市民センター　令和5年5月27日

暑いネと誰もが笑ひビール呑む　安藤　靖
ワンピース風吹きぬけて薄暑かな　生田　暁美
きじ鳩に夫の死を知らされて青葉　石鎚　優
街薄暑行き交う人の白さかな　岩田　信
婚活の背後に潜む薔薇の棘　占部美土子
諍いの眉を下げゆく柏餅　岡田　良子
花蜜柑蜂の羽音やふと我に　奥村　純子
己誉め世渡りしている尺取虫　金栗トモ子
石榴の花吉祥天の居るような　佐々木重満
紫陽花や鎌倉五山濡れてをり　土岐　詳恵
寂しがるポケットに飴多佳子の忌　長島喜代子
気休めの老いのリハビリ薄暑かな　野口美穂子
風に揺れエールをくれる忍冬　平山　圭子
一畝の丸く太りて莢豌豆　廣田　洋一
七変化介護ロボット軟派され　藤方さくら
大盛の筍飯や黒茶碗　星　由江
涼風のきみに吹きたりブイ・ネック　柳　蒼柳
ラッキョ漬け俳句の味を吟味する　渡辺　正剛
赤い土壁異郷の路地の五月闇　伊藤　梢

第三〇〇回　令和5年6月24日

群れゐるは女の性よ額紫陽花　安藤　靖
標識の「この道行き止り」とや閑古鳥　石鎚　優
青蔦の実のなほ青き風に揺れ　生田　暁美
幸福とは平凡な日々七夕竹　岩田　信
園児らが被る夏帽皆阿弥陀　大山　賢太
虹立ちて大地の修羅を映し出す　岡田　良子
この寿命全うせんと夏期講座　金栗トモ子
夏薊淋しさ隠し上向くや　佐々木重満
ナフタリンぬけがらとなり更衣　土岐　詳恵
羊羹の甘さしっくり梅雨じめり　中村まさえ
十薬と言へば効きめのありそうな　野口美穂子
梅雨深し権太鴉もだみ声に　長谷川昭放
気に入りの日本酒冷やす父の日よ　平山　圭子
暮れぬ日を見つつビールを酌みかはす　廣田　洋一
水無月やマイナンバーの五感かな　藤方さくら
黙々と生き枇杷の実の連なりし　星　由江
湘南を黄金に染むる麦の秋　柳　蒼柳
百歳は万々歳や百合の花　渡辺　正剛
帆掛け舟虹見えるとき天へ翔つ　伊藤　梢

第三〇一回　令和5年7月29日

潜水服吊られ始まるサスペンス　安藤　靖
　悼「西部俳句研究会」
男根は振子時計か雲の峰　石鎚　優
できずとも猛暑楽しむ句作かな　岩田　信
見えすいた嘘を重ねて大夕立　岡田　良子
乾燥の畑にトマトは完熟し　奥村　純子
世界中の怒りと泪麦の秋　金栗トモ子
拍子木の打たれ花道佳境なり　田畑ヒロ子
コラーゲンの現状維持よ梅雨明ける　長島喜代子
夜の蟬明日があれどもなけれども　中村まさえ
諦めぬ老いのリハビリダリア咲く　野口美穂子
大向日葵ゴッホの耳が落ちている　長谷川昭放
ふるさとの親しき川よ梅雨出水　平山　圭子
湘南の海きらめきて土用凪　廣田　洋一
八月十五日右も左も黙祷す　藤方さくら
持て余す午後の睡魔や西日透き　星　由江
暑いねと云えばウンダと山彦も　柳　蒼柳
軽鳧の子のさらはる一瞬只見上ぐ　渡辺　正剛
白南風や海の近くのケーキ屋さん　伊藤　梢

◎連絡先…事務局芳賀陽子まで

みなとみらい句会

菅原　若水　報

第三九九回　於　横浜市社会福祉センター　令和5年5月6日

五月来てマスクはずせば無精髭　岩田　信
朝ぼらけ声を散らしてほととぎす　内田ゆり子
山霧のふっと途切れて髭男　尾崎　竹詩

俳人交遊録　第十四回

大石雄介氏を忘れた人のために

川名　大

大学時代の俳句研究会、教員時代の同人誌「俳句評論」「騎」などを通して多くの俳人との出会いがあった。その中には師と仰いだ高柳重信氏や、畏敬した先輩折笠美秋氏との出会いもあったが、ここでは神奈川県現俳協ということで小田原の大石雄介氏について語ろう。

昭和四十三年、高柳氏が「俳句研究」の編集長に就任したのを機に私は同誌の「俳句月評」と十二月年鑑号の「評論展望」を執筆することになった。「俳句月評」は一年間を三人で担当（四ヶ月で交替）、「評論展望」は同じ三人が「俳句研究」「俳句」「その他の俳誌」を分担執筆。年月の経過と共に執筆者は交替したが、私は一貫して執筆。昭和四十年代後半から五十年代前半は大石氏と澤好摩氏と私の三人が担当。両氏は俳句の本質的な問題をラジカルに掘り下げ、論理的に追及する才を存分に発揮したので、この時期の「俳句月評」「評論展望」は最も充実していた。また「年鑑号」の「俳論年表」では三人で協議、精選作業したことも懐かしい。

同じ頃、大石氏は「海程」の編集も兼ねていたように記憶する。「海程」の歴史上、大石氏が編集した「海程」が最も密度が濃いことは周知の事実。昭和四十年代末期、三好行雄先生の研究室で「昭和俳句の展開」の指導を受けていたとき、同じ階でインド哲学の助手をしていた大石氏と会うのも楽しみだった。その後、大石氏は長瀞に定住、「海程」編集に専念。五十年代後期、「海程」主宰誌化に抗し、表現史への参加こそ俳人というポリシーを貫いて「海程」脱退。その揺るぎない歩みを私は深くリスペクトしている。近年、目を病む由。ご加餐あれ。

秀吉の口髭ずれて行々子　金栗トモ子
ビール酌む俳句仲間の無精髭　坂　守
老後の資金たんぽぽの絮が飛ぶ　里見　美季
志村けん髭の踊りは加トちゃんと　菅原　若水
春の闇ポアロの髭が謎をとく　芳賀　陽子
子供の日郵便受けが大欠伸　早坂　澄子

高木暢夫さん逝く

ダンディーな笑顔零して春の逝く　藤方さくら

謹悼　高木暢夫君

飛花しきりトライアングル置き去りに　吉村　元明

第四〇〇回　令和5年6月10日

薫風を全速力のウーバーイーツ　岩田　信
水口に束ねて置かる余苗　内田ゆり子
雲海に隠れる城の物語り　金栗トモ子
巻貝の涼しく夢をみるような　里見　美季
虎耳草耐える力の美しき　菅原　若水
ヘアカット鏡の中の走り梅雨　西見　瑛子
重力か多感か実梅また落ちる　芳賀　陽子
枇杷の木にちゃんちゃんばらばら鴉の目　早坂　澄子
ジューンブライト鎌倉の人力車　藤方さくら
白番のぴしりと布石迎へ梅雨　吉村　元明
露草やだんだん午後の老人力　若林つる子
梅雨晴間庭に出るなと腰が泣く　渡辺　正剛

第四〇一回　令和5年7月12日

サングラスかければ目覚める若気かな　石川　夏山
油照りやることなすこと正誤表　岩田　信
夏座敷認知の姉の点前かな　金栗トモ子
生来の負けず嫌ひや浮いて来い　坂　守
茉莉花の香り掃かれて真昼憂し　里見　美季
地獄ならテレビで観たよパリー祭　菅原　若水
凌霄花江の島の空深くする　長島喜代子
八月や訂正印がまだ足りぬ　芳賀　陽子
正剛師まだまだ老いぬ夏椿　藤方さくら
今日もまた素麺すする正午過ぎ　藤原てい子
戦場に正義はなかり日雷　三沢　容一
蟻蟻へおっとっとっと一輪車　吉村　元明
荒梅雨や水はいのちと言うけれど　若林つる子
骨拾ふやがて拾はる月見草　渡辺　正剛

第四〇二回　令和5年8月12日

これはもう天地創生の炎天　上野　京子
地球へのレッドカードは月が出す　石川　夏山
浮世ではうくことばかり夕端居　岩田　信
燃料は酒祭太鼓の乱れ打ち　金栗トモ子
昆虫食になるかならぬか蓑虫は　里見　美季
轡虫墓守として三世紀　菅原　若水
よく歩く昭和生まれの夏帽子　長島喜代子
来世にまた逢う約束赤とんぼ　芳賀　陽子
サーファーの首の十字架波高し　藤方さくら
世直しの如くゴキブリ叩きけり　三沢　容一
すれ違う香水回転ドアの風　吉村　元明
故郷は冥土に近し盆迎ふ　渡辺　正剛

◎連絡先　菅原若水　s-shinya@s6.dion.ne.jp
までご一報ください。折り返し「句会へのお誘い」をお送りいたします。

星川句会

金栗トモ子　報

令和5年5月1日

五月

骨董市で道化師（ピエロ）に会釈され青葉　石鎚　優
百二十分講義始まる五月から　上野　京子
耳なりの膜の向こふの蜃気楼　江原　文
連弾の母子和める百合の花　桐山　芽ぐ
坂本龍一死して青葉木菟　大塚　真紀
柿若葉静かなる雨一少女　栗原嘉一郎
横井戸の水こんこんと著我の花　徳丸　昭広
バトン継ぐあと百センチの蝸牛　町野　敦子
猫の手の追う蒲公英の和毛かな　渡辺　順子
花電車レールの先は昭和の日　金栗トモ子

令和5年6月5日

六月

爪切ってつくづく未熟柿の花　麻生　明
脊梁山脈さみしいと言へ月見草　石鎚　優
ほうたるや転生よりは進化論　上野　京子

【結社便り】　第十一回

「波」　主宰　山田　貴世

昭和五一年五月、青木泰夫が代表選者として創刊。昭和五八年主宰となる。泰夫逝去後、倉橋羊村、次いで山田貴世に引継がれ今日に至っている。

令和五年八・九月合併号で五五四号となる。

「湘南の文化の香の高い俳句誌」を標榜して発足したが、現在は全国誌展開を図っている。

東京、藤沢で毎月行われている本部例会をはじめとし山形支部、山形第二支部、宮城支部、埼玉支部、京葉支部、町田支部、横浜支部等々。教室サークルでの活動も各地で行われている。

作句に於ては旧仮名遣い、新仮名遣いどちらも容認しており、本部例会も自由闊達に意見を述べ合い切磋琢磨して勉強している。

年一回、開催されている同人総会、吟行会、春の俳句大会などの行事も着実に行われており、会員相互の親睦を深める良い機会になっていることは嬉しいことである。

来る令和八年五月には創刊五十周年を迎えることになる。同人会、各部役員、会員諸氏が一つになって更なる境地に向かって歩んで行きたい。

蓮の実飛ぶ未来永劫信じつつ　山田　貴世
山粧う真っ只中へ舟下る　霧野萬地郎
秋の夜は陽気なジャズにしませんか　山下　遊児
月今宵入江の形に暮しの灯　富山ゆたか

発行所　波俳句会
〒251-0825　藤沢市本藤沢一-八-七
山田貴世方
Tel/Fax　0466-82-6173

薔薇咲いて山ほど咲いてイエスタデイ　大塚　真紀
新樹光鴉の会話に入りたい　桐山　芽ぐ
生ビール今宵も集う仲間たち　栗原嘉一郎
漆掻く殺し掻きとはむざんやな　菅原　若水
六月の海快調な滑り出し　長島嘉代子
快晴のベンチに黒の夏帽子　藤原真理子
新緑の大海原へ孵化したる　町野　敦子
解体の跡地夏蝶のさまよふ　山崎美恵子
恋蛍交信はフランス語です　金栗トモ子

七月　令和５年７月３日

赤々と夢見る真夜の熱帯魚　麻生　明
青梅の一つ転がるバスの中　大塚　真紀
十薬をからからにして逝きし母　桐山　芽ぐ
老いふかしまだまだいける夏に乗る　栗原嘉一郎
空き缶に一輪挿して夕涼み　菅原　若水
七月の光をひろう外人墓地　長島嘉代子
泣きまねのうまい子もいて夏休み　藤原真理子
青葉木菟誰に薬を渡したか　町野　敦子
ビル街に夕立凌ぐ軒場なく　渡辺　順子
膏薬を膝に肩にと冷素麺　金栗トモ子

八月　令和５年８月７日

猥談も海女らけらけら海紅豆　麻生　明
男根の歌声をきけ雲の峰　石鎚　優
秋色乗せて発車オーライローカル線　桐山　芽ぐ
傘寿こえ電動車で飛ぶ炎天下　栗原嘉一郎
読みさしのヒロシマ・ノート蝉しぐれ　里見　美季
車にも断末魔の死初嵐　菅原　若水
巻き尺のするりと延びる熱帯夜　長島嘉代子
海老天の尾のまっ赤なる終戦日　なつはづき
寝不足のラジオ体操夏の果て　藤原真理子
返納し歩き疲れて蝙蝠くる　町野　敦子
サミットに生温き風原爆忌　渡辺　順子
夕焼けや一人遊びのケンケンパ　金栗トモ子

◎毎月第一月曜日　星川駅下車「かるがも」または「アワーズ」で開催。
◎連絡先：事務局芳賀陽子まで

丹沢句会

竹村　半掃　報

順不同・秦野市西公民館

五月句会

突然には戦とならず走り梅雨　岡本　保
粽食べ戦国憂う泪羅江（べきらこう）　杉本　弼
はるのそらしまいわすれたふとんひとつ　羽田　勝二
首大仏螺髪に若木生まれたり　渋谷　徹
水草生ふ誰が呼ぶのか泡あふれ　いけ　まり
鳩時計閻魔大王陽炎えり　佃　悦夫
莢豌豆習性知らず支柱増ゆ　立石　采佳
大谷の兜（かぶと）るんるん南部藩　北村　文江
闇に落つ一条の焔滝明かり　菅沼とき子
高層群脱けてローカル麦の秋　加藤かほる
寸志ほど紋白蝶に肌ゆるす　輿　起
落花生蒔くふくよかな笑みしたものを　佐々木重満
平和記念館出でし九人の溽暑かな　尾崎　竹詩
走り梅雨線香立ての硬き灰　芳賀　陽子
売れ残り翌朝値引きカーネーション　三橋　伸子
路傍の石蟻の命の救はれし　加藤　三眠
金魚だねつぶやく老婆の金魚草　飯田美枝子
言の葉と青葉若葉の三重奏　長谷川昭放
慈悲心鳥（じゅういち）の声朗らかに五月来る　酒井　天敏

六月句会

生成ＡＩ馬鹿と鋏のヨットレース　杉本　弼
薔薇園を歩けば香り動きたり　田畑ヒロ子
梅雨寒や個体識別「ヒト科」なり　竹村　半掃
点描ノオンチ手招ク　虹ノ空　輿　起
どこまでも伸びるつもりの梅雨の草　飯田美枝子
自死かとも地上に蚯蚓乾びいる　加藤かほる
チェシャ猫のにたにた笑い青嵐　加藤　三眠
青梅雨や狂気沙汰なるダム破壊　酒井　天敏
老鶯の細く短く二三声　立石　采佳
紫陽花やマチスの色を使ひきり　澁谷　徹
己が美も棘も知らずや浪速茨（なにわいばら）　佐々木重満
夏帽子電子クーポンバスの旅　三橋　伸子
おおにじがこうはいのごといえつつみ　羽田　勝二
青水無月身の内に棲む邪鬼払ひ　北村　文江
真夜中や精霊蜉蝣最前列　佃　悦夫
レコードの針とぶところ沖縄忌　岡本　保
草を刈る刈らねば一村荒野かな　長谷川昭放

七月句会

羽抜鶏鷹の眼を持ちにけり　篠崎　妙子
紫陽花や役者死なむと薬飲む　酒井　天敏
生国の空を刻むや夏燕　佐々木重満
端居して爺は第三反抗期　長谷川昭放
ああうまい　このいっぱいの夏の水　羽田　勝二
罪と罰越えた所に罌粟坊主　いけ　まり
球児等に未だ未踏の雲の峰　尾崎　竹詩
野ノ詩人ケブラヌヨウニ火蛾抱ケリ　輿　起
ほうたるの黄泉の水先明るうす　竹村　半掃
扇風機は強もやしのひげねとり　立石　采佳
銀河へと往きて還らぬ仮眠かな　佃　悦夫
手さぐりの未来をよぎるサングラス　北村　文江
はいくほく雑に神祇に恋も死も　二上　貴夫
飽きもせず今朝も覗きぬ青トマト　田畑ヒロ子
蚯蚓なく腸持たぬ兵馬俑　岡本　保
ひまわりの直とこの世へ向く眼　加藤かほる
夏草やニッチに生きる心意気　加藤　三眠

◎連絡先：事務局芳賀陽子まで
◎毎月第三金曜日、午後一時より原則、西公民館で開催。小田急線、渋沢駅より徒歩７分。

川崎句会

山田　ひかる　報

於・川崎市総合自治会館

五月　5月20日(土)

天を向き屹立したり葱坊主　青島　哲夫
牡丹をとりまく草も花咲けり　麻生　明
常備薬が転がっている立夏かな　加賀田せん翠
野良猫の首輪のあとや走り梅雨　斎藤佳代子
不言色は母の形見の夏の帯　佐藤　鈴代

緑雨中お隣りさんは引越しぬ　佐藤　廣枝
ショパンより風の伝言夕涼み　菅原　若水
抜き差しのならぬ方へと春ショール　関戸　信治
黄砂来と坂口安吾風の家　ダイゴ　鉄哉
ヒーローになりきる少年夏の空　花澤ちいこ
色落ちのジーパン乾さる柿若葉　三沢　容一
初夏や触れ合ひはまづ葉音から　武良　竜彦
ままごとや毒と言われし蛇苺　吉居　珪子
５Ｈの色鉛筆画蛇の衣　山田ひかる

七月　7月15日（土）

遠浅の美しき海なる沖縄忌　青島　哲夫
朝焼けの遠山昏く動き出す　麻生　明
冷し酒煩悩だけで生きている　石川　夏山
向日葵や遠近法で描く自画像　植田いく子
古民家の乾ききったる夏座敷　加賀田せん翠
遠花火いずれ私もゆくところ　斎藤佳代子
白玉のガラスの匙の碧さかな　佐藤　鈴代
のうぜんや花丸見せ合う子供たち　佐藤　廣枝
夢に侵入遠雷のお邪魔虫　菅原　若水
ナイターや捕手が股間に指動かす　関戸　信治
多摩川へいや万緑へ遠足だ　ダイゴ　鉄哉
丸椅子のをんなは素足組みなほす　花澤ちいこ
をんな坂ゆくは日傘の優男　三沢　容一
鰓が欲しこの夏空を見上げては　武良　竜彦
鱚の字を知りて天ぷら注文す　吉居　珪子
サングラスわたしの時間遠ざける　山田ひかる

八月句会　8月19日（土）

朝顔やはやばや留守の家となる　麻生　明
死ぬときは仰向けになる蟬さへも　石川　夏山
いつの間にややこしく咲く炙花　加賀田せん翠
新蕎麦の割り箸杉の柾目かな　佐藤　鈴代
ひらき一枚割箸二膳冷し酒　佐藤　廣枝
約束はついに果たせず終戦忌　菅原　若水
公開の砂雪隠や葛の花　関戸　信治
汗一斗歩み千歩や御前酒飲む　ダイゴ　鉄哉
張りつひて静止画となる残暑かな　花澤ちいこ
俳人は常に割勘暑気払ひ　三沢　容一
割引きて語る人生盆の月　武良　竜彦
近道と割り切っている百日紅　山田ひかる

◎連絡先：事務局芳賀陽子まで

湘南サンシャイン句会　堀口みゆき　報

藤沢市民活動推進センター二階会議室　5月5日（金）

第90回

雉鳩に夫の死を告げられて青葉　石鎚　優
スカイツリーを川面に浮かべ夏来る　荻野　樹美
ポケットの海を展げて夏来る　菅原　若水
たっぷりと川巾泳ぐ鯉幟　田畑ヒロ子
青葉風一歩踏み出す転車台　芳賀　陽子
自転車の等間隔に風光る　馬来まち子
ミサイルが翔ぶ子燕は餌を待つ　山口　愛子
新緑に埋もれて見えぬ青信号　山下　遊児
同期はや七十年経つ蜆汁　渡辺　正剛
川覆ふ音幾千の鯉のぼり　堀口みゆき

第91回　7月7日（金）

山菜摘筍だけを提げてくる　安藤　靖
背梁山脈石畳の蟻多忙　石鎚　優
曼陀羅草猛毒の花美しく　大山　賢太
半夏生これが最後のワクチンぞ　荻野　樹美
叶いつあの子とボートこの暑い中（※回文）　木村　哲也
忘れ物もう探せない原爆忌　菅原　若水
蠅叩き物体としてかけてある　田畑ヒロ子
無一物なる境地なり心太　芳賀　陽子
風鈴や越後の町屋土間広し　日置　正次
兵士たち前へ前へと夕焼ける　保里よし枝
あめ玉のくつつき合うてゐる暑さ　馬来まち子
物心つきし時から猫じゃらし　山口　愛子
ぐらぐらと漢が使ふ日傘かな　山下　遊児
茉莉花や恋しき人は痴呆症　渡辺　正剛
とうすみの過ぐ目鼻なき人物画　堀口みゆき

第92回　8月4日（金）

夏休み雲の育つを見てゐたり　安藤　靖
ひれ伏して聞きし玉音遠花火　石鎚　優
沸騰の地球なれども玉あじさい　荻野　樹美
玉砕のかすかなにほひ運動会　菅原　若水
八月や焔立ちたる火焔土器　田畑ヒロ子
白玉やつるんと飲み込むよまい言　芳賀　陽子
軍神と鳩が友達広島忌　日置　正次
敗戦日ラップ流れるカーラジオ　保里よし枝
息つめて線香花火の玉みつめ　馬来まち子
ごくごくとおっぱいのんで玉の汗　山口　愛子
ＳＬのやうに息する夏の犬　山下　遊児
玉音は記憶の底よ終戦忌　渡辺　正剛
自転車を停めて踊の輪の中に　堀口みゆき

◎湘南サンシャイン句会吟行会のお知らせ

日　時　十二月一日（金）
吟行地　藤沢駅周辺（新林公園、遊行寺等）
場　所　藤沢市民会館第一展示会ホール
会　費　千円　当季雑詠　2句
講　師　小笠原伸子氏（バイオリニスト・横浜バロック室内楽合奏団を結成主宰・東京室内管弦楽団コンサートマスター）

東京芸大・同大学院卒後イタリアにてＳ・アッカルドに師事。当地にて演奏活動。２００９年横浜文化賞文化芸術奨励賞を受賞。

◎連絡先
堀口みゆき　miyuhoriguchi@yahoo.co.jp
℡０９０　３９１４　０５６８

インターネット句会　宮永　武彦　報

五月句会

初夏やヒトの匂いのするマネキン　石川　夏山
露座仏の指ふと動く麦の秋　江原　文
昔々蝸牛は耳だつた　菅原　若水
湖（うみ）の面（も）に影の交わる夕つばめ　麻生　明
密談は蛍袋が咲いてから　町野　敦子

鯉幟立泳ぎして谷渡る　須藤　節子
草取りに追われ頭の中に草　桐山　芽ぐ
蓮の花アウフヘーベン実行中　佐々木重満
藍色の服にアイロン夏来る　渡辺　順子
新緑を白内障にしたたらす　長谷川昭放
みかんの花ほろほろ宮沢賢治の修羅　平田　薫
死を悼む縄文人や花胡桃　夏陽きらら
雉鳩に夫の死を告げられ青葉　石鎚　優
想い出の唄の流れて夏は来ぬ　多久島重宏
無伴奏チェロ五月雨の夜深む　田中　治夢
ヴィオロンの調弦合はず目借り時　矢口　椛子
紫陽花や今年も淡い海の色　宮永　武彦

六月句会

行きずりの人の顔して青蛙　江原　文
頬杖はいま新緑のなかをゆく　平田　薫
公平に他人を見ているサングラス　麻生　明
おおぞらへ矢車草の青に乗る　町野　敦子
留守番の影のはみだす砂日傘　渡辺　順子
木洩れ日の影絵ふみゆく夏来る　田中　治夢
洗って切って盛り付けるだけ夏料理　桐山　芽ぐ
宗教は玉葱という神を持つ　菅原　若水
あめんぼう技盗られても澄まし顔　須藤　節子
ひき返さざりしこの道走馬灯　石鎚　優
薄明の意識の岸辺蛇は着く　石川　夏山
袖口のボタンを外す夏の月　斉藤　祐子
観音の素足冷たき石蓮華　多久島重宏
英霊の光る泪か夜光虫　佐々木重満
バッハにやっ楽器置場の黴の香や　矢口　椛子
缶ビール干しさびしさを積み上げる　宮永　武彦

七月句会

革命の起きる気配もなくビール　江原　文
モナリザに眉毛がなくて涼しかり　桐山　芽ぐ
走馬灯母胎の果ての宇宙かな　石鎚　優
太陽のフレアとなって凌霄花　町野　敦子
せせらぎの体内ながれゆく夏野　田中　治夢
遠花火話したかった人もいた　石川　夏山
蜘蛛の糸のぼってゐるか河童の忌　菅原　若水
じいちゃんがつかんですてる青大将　麻生　明
みんみんの声の限りを磯馴松　堀口みゆき
五感に黴やりたいことが見つからない　金栗トモ子
巾着のなかは不思議な時計草　平田　薫
ゆらゆらと揺れる海月もわたくしも　渡辺　順子
まほろなる水音したる青田かな　佐々木重満
打水の跳ねて静寂の小虹立つ　多久島重宏
友好に健気につくす花木槿　須藤　節子
投げ込みし金銀の斧青みどろ　吉村　元明
金雀枝や鉄柵の蔭猫朽ちてゆく　矢口　椛子
少彦名命の小舟初夏の風　宮永　武彦

◎投句、選句、選評すべてインターネット上で行っています。毎月第三月曜日投句〆切。
連絡先　宮永武彦　takehikom0410@gmail.com

磯子凪句会

尾澤　慧璃　報

於横浜市社会教育コーナー
令和5年5月24日

五月

時計草針止め咲くや無言館　清水　瑛子
背後から人来る気配竹落葉　池田恵美子
枇杷熟るる坂下りたる市電かな　鹿又　英一
若葉風村にひとつの丸ポスト　長濱　藤樹
出目金の物怖じのせぬ目玉かな　村上　裕也
あぢさゐや天気の読めぬビルの街　川野ちくさ
ポンちゃんと蠅虎を呼ぶ二人　伊藤　方惠
空気入れの貸出無料街薄暑　尾澤　慧璃

七月　令和5年7月26日

西行の歌碑の剝落木下闇　佐藤　久
金魚売の来てゐる杉田商店街　池田恵美子
落語家の牡丹燈籠夏の夜　村上　裕也
つくつくし川風に待つジャズライブ　長濱　藤樹
落日に染まる湿原糸とんぼ　鹿又　英一
落柿舎を横目に過ぐや落し文　川野ちくさ
夕立やくつくつと鳴る落とし蓋　尾澤　慧璃
身ひとつを守る日傘のかろさかな　伊藤　方惠

◎会　場…横浜市社会教育コーナー研修室C
（JR磯子駅より徒歩4分）
◎日　時　奇数月の第4水曜日　13時～
◎連絡先　尾澤慧璃　045（512）5125

金八句会

杉　美春　報

五月

金沢の「あめ」と大書の麻のれん　松浦　泰子
さみだれや賃上げ未だ派遣社員　扇　義人
手をつなぐダボパン父子風光る　神谷　純子
白夜かな猫はその尾を細く立て　なつはづき
シスターの踝見えて杜若　杉　美春
境内の箒の掃き目青葉騒　尾澤　慧璃
夏の宵ズームが猫の髭捉え　里見　美季
喪の家に赤白八重の立葵　中村　光男
青竹やイースーチーと風抜けて　佐藤　久
夏空やおもちゃのからす睨み居り　村上　裕也

六月

円周率割出してゐるみずすまし　中村　光男
洋館のドアは開いて薔薇の風　里見　美季
鉄棒にくつついてゐる石鹸玉　尾澤　慧璃
引潮を追ふサンダルの砂まみれ　杉　美春
古代への旅の入口花卯木　松浦　泰子
眉墨の薄細き線風涼し　村上　裕也
花あやめ薩摩切子の藍深く　扇　義人
海鳴りは父　額の花が咲いたよ　なつはづき
黒南風や老犬つらき散歩道　神谷　純子

七月

地下街の風鈴市の静けさや　村上　裕也
舟虫や謀議はすでに発覚す　中村　光男
海風の街に幟や枇杷実る　神谷　純子
帯解けば水の香のする蛍の夜　なつはづき
沙羅の花白し言葉を遠回り　里見　美季
珈琲に溶けるシャンソン梅雨深し　佐藤　久

捩花や円卓会議きりもなし　松浦　泰子
桔梗や砂紋のうねる源氏庭　扇　義人
お悩みの相談ページ梅雨湿り　尾澤　慧璃
風刺画の線のほどけて凌霄花　杉　美春

八月

秋の川流れる宿に眠りけり　神谷　純子
元町議ずんずん入る踊の輪　中村　光男
夏雲やピカチュウの湧くみなと町　佐藤　久
積上げし本を廊下に熱帯夜　松浦　泰子
白樺の径に迷ひ出親子鹿　扇　義人
兵児帯の金魚のかたち山車囃子　尾澤　慧璃
青い実の土にかえるや炎天下　村上　裕也
夾竹桃海へと続くハイウェイ　杉　美春
秋ほたる傘高く差し君を待つ　なつはづき
籐椅子に触れるや何か毀れそう　里見　美季

◎毎月第二金曜日　夜８時より。ＺＯＯＭ使用
◎連絡先　杉美春　miharusugi@jcom.home.ne.jp

企画部　初心者講座報告

なつはづき

封切りを君と観にゆく南風　岩渕　美帆
幼子の傘に窓あり立葵　田渕　信也
花は葉に手打ちそば屋の三代目　栗原嘉一郎
積乱雲中に隠れる鬼と雹　下野真知子
緑陰や笹の芽で編む親子亀　庄下　敦子
街路樹や色も際立つ百日紅　赤嶺　茂光
花の舞う堤ゆっくり車いす　谷川冨美子
青墨の色透き通り夏の月　横山　幸子

会員新刊案内

横浜寒雷忘備抄・第二十七集

（令和四年十二月刊）

杉　美春　記

寒雷横浜句会の合同句集。参加者十五名が、ひとり二十句とエッセイを発表している。第二十七集と巻を重ねてきたことをお祝いし、敬意を表したい。

以下、ひとり一句を紹介させていただきます。

秋の種蒔く終生の地と定め　安藤　靖
雪の果遺品に潜む別の父　奥村　純子
海光や間口広々種物屋　川村　研治
向きてんでんシクラメンの噂好き　熊倉よりこ
鷹柱見てひとりづつ消えにけり　佐分　靖子
篠竹のそよぎ春立つものの息　須江　吉雄
新緑の牧場子牛の器量定め　すえよし杉子
種ふくべ総身に知恵のまはりかね　高橋喜美子
羽抜鳥のつぴきならぬときに飛ぶ　多田　学友
桜餅ぶら下げて行く祈りの場　西村　起代
フレンチトースト春の光をたつぷりと　浜岡　紀子
ことさらに何もなき日の豆御飯　星　由江
春キャベツきざむ面倒事きざむ　三井　つう
もう少し寝かせてやれや浮寝鳥　宮本　峨々
撃ち合ひし互いに春待つ妻子あり　吉田南舟子
皆様のますますのご健吟を御祈り申し上げます。

星永文夫句集『夢幻座』（文學の森）

つはこ江津　記

縦26・5㎝、横16・5㎝の大判の句集だ。不遜にも無闇にデカイと思いながら腕を伸ばし頁をめくった。すると程なく訪れたこともない不知火海や八代平野がうっすら眼の前に広がりだした。

八代平野に白鷺降りて　蒲に穂が
不知火海（しらぬい）に惜別と書く秋落暉

そうか、ここは劇場だったのか。星永はことばでキネマトグラフ（活動写真）を創造したかったという。14のキネマ篇全１２９句を収録する。大きなスクリーンを必要としたわけである。

立ち初めの臍の高さを野火走る
穂芒に囃され　地霊よく転ぶ
股座（またぐら）に神いて　春を組み替える

氏は熊本に在って、２０１９（令和元）年百号を以って終刊するまで、結社誌「霏霏」の主宰として後進の指導に当たってきた。後継誌「霏霏Ⅱ」を後人に委ね、神奈川の仲間となられた氏の、多少の不如意を凌駕する自由な精神と「詩格の変革」への想いは横溢して尽きない。

『夢幻座』は、夢まぼろしのごとき己の〈人生〉を、演じて（映して）観客に見せる己の舞台で、演者がそこで「是非精華を一つ咲かせてやるぞ」と心に叫ぶ、正念場でもある。

〈あとがき〉にこう書く氏は今年90歳。

戦場の予感じゅうぶんに　曼珠沙華まんかい
首吊りの樹に　百年百の花咲いて
山眠る　樹々の便りの言霊抱いて
ざくろ音して割れる　さよならの朝だ

氏が願う「夢幻座」という星座は必ず誕生するに違いない。

「アフリカ滞在記　俳句とともに」

霧野萬地郎　著
（東京図書出版）

波俳句会　山下　遊児　記

この本を読み進んで行く内にこれは単なる滞在記では無く小説では無いかと言う錯覚に陥ってしまった。何故ならばハラハラドキドキ次はどうい

う展開になってしまうのだろうかとサスペンスドラマを見ている気持ちになってしまったからである。

内容についてここで述べてしまってはこれから読んで頂く読者に対して失礼なので敢えて触れない事とする。ただ言えるのは仕事とは言えアフリカと言う非日常を日常にしてしまう作者の勇気と大陸的な好奇心に感動を覚えた事だ。さらに驚くのは単身での滞在ではなく奥様やお子さん達も一緒だったと言う事だ。わが家の様に小さな出来事で喧嘩を繰り返している家族と違ってスケールの大きい家族で、真似しようと思っても出来る事ではない。

ところで霧野萬地郎と言う名はタンザニアの北東部にある成層火山キリマンジャロから来ている。それほどアフリカ愛に溢れている証拠である。同じように俳句愛にも溢れている。

吾を向く銃口黒き木下闇
西瓜盗る猿を狙ってライオン来
ハイエナの骨遊びする夏野かな
牛糞の壁も夕焼けマサイ族
熱風や吾指す被告の居丈高
日盛りや街角ごとに少年兵
安着をローカルビールで乾杯す

これから読んで頂く方はこれらの句から内容を想像して頂きたい。付け加えるとページを彩る多くのカラー写真も臨場感を盛り上げている。

最後に、アフリカは危険・貧しいと言ったイメージがあるが、裏返せばそれは大自然の宝庫であり希望があると言うことなのだ。

吉村元明句集　人生は『邯鄲夢の手枕』
目で観る句集＆自分史（文學の森）
芳賀　陽子　記

この度、吉村元明氏は句集『邯鄲夢の手枕』―目で観る句集＆自分史―をご上梓された。目で観る句集とあるように、絵を描かれる彼ならではの、アングルの良さが光る写真が豊富な句集となっている。

この句集の発行を見られることなく鬼籍に入られた髙木暢夫氏の序文には、「元明さんの句はおしなべて明るい。偏屈なところがない。ロマンの香りが漂って心地よい。」とあり、たまたま大学の同期生であったというお二人の、静かで穏やかな大人の友だち関係を伺い知ることが出来る。

また、自分史の中では、幼い頃の疎開でのこと、小学校の担任の先生からのお手紙を現在まで保存する等、几帳面さと記憶力の良さに驚かされる。

そして青年期、ビジネス時代と誠実に取り組んで来られた企業でのご活躍ぶり、またその後の起業でのパワフルな暮らしぶり等垣間見ることができる。

一斉にめくりし楽譜春立ちぬ
白南風や音軽やかにプルトップ
手風琴の残響透ける街白夜

それぞれの音が、時々の景を鮮やかに切り取り、物語を立ち上がらせてゆく。

草枕春の愁ひを谷折りす
蟾蜍一歩進めば一歩過去
冬青の実落つさよならの無き訣れ

紡ぎ出す言葉のひとつひとつが、作者の心象を詩へと昇華させてゆく。

鬼の子よ人間失格やもしれぬ
幸せの収支とんとん松飾る

ダンディでありしは昔ちゃんちゃんこと言いながらも、何時までもダンディであり続ける作者の佇まいに、不自然さを感じない。

吉村氏の益々のご活躍を期待したい。

講話　想い出の俳人（要旨）　**栗林　浩　記**
川崎ブロック吟行会（六月二十九日）にて

最近、黒田杏子さん、大石悦子さんらの訃報をきっかけに親しくさせて戴いた人々を思いだしている。

黛　執さん　令和二年十月二十一日　享年九十

学徒動員、市民運動、飯田龍太からの励ましのことなどを伺った。五所平之助の教え＝俳句は①美しくなければならない、②見えなければならない、③平明でなければならない、を終生守った。

雨だれといふあかときの春のおと
立話する間も麦を踏んでをり
春の夜を上りつめたる春の月
うれしくてたまらぬやうに初つばめ（病床での句）

友岡子郷さん　令和四年八月十九日　享年八十七

疎開、原爆、食糧難、『火垂るの墓』、龍太と「雲母」の先輩、阪神淡路大震災などが思い出される。

跳箱の突き手一瞬冬が来る
倒・裂・破・崩・礫の街寒雀
いちまいの瓦の上の手向け雛
ただひとりにも波は来る花ゑんど
冬雲雀師も通ひたる校舎見ゆ（龍太思慕の句）
死に泪せしほど枇杷の花の数
ありのままの自然に情を籠めて詠んだ句が多い。

澁谷　道さん　令和四年十二月二十九日　享年九十六

新庄の澁谷家、芭蕉、女医（大阪）、師の平畑静塔、橋閒石、永田耕衣、金子兜太らへの敬慕を話された。大阪から最晩年は埼玉県に住まわれた。

馬駈けて菜の花の黄を引伸ばす
灰のように鼬のように桜騒
折鶴をひらけばいちまいの朧
米袋ひらいて吹雪みせてあげる

先生は伝統派ではないでしょうか？　と聞いたら、「そうです」と、その訳を丁寧に答えてくれた。

【新しい風】　神奈川の若手俳人（第八回）

宮永　武彦

「命」

幸せを手紙に託すこどもの日
カーナビの目的地なり冬銀河
原罪の瘡蓋のごと秋の雲
凍滝や個の崩壊の軋る音
命得て線香花火の煌々と
啓蟄や命は向かう光へと
鰯漁命のバトン受け取って
敗北もまばゆし夏の球児たち
桜貝あの日の心さがしてる
勿忘草そよ風を貼る切手かな

四十歳の時に祖父の故郷である鹿児島を訪れた際の不思議な出会いから俳句を始める。生前祖父は俳句を嗜んでいたようで、俳号まで持っていたようですが、どういうわけか、句が一句も残っていないのが残念。

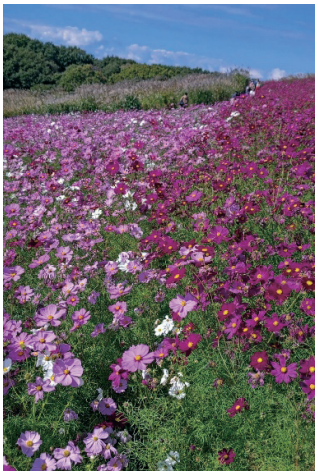
以来、毎月五句作り、結社へ投句することを目標にしている。拙句が活字になり、俳句誌に載せてもらえることが嬉しく、励みとしながら、マイペースで続けています。一句でも多くの句を作り自分を表現するものとして残していきたいです。現在、句会、吟行会やインターネット句会（神奈川現俳）に参加し、勉強させて頂いています。これからも精進していこうと思います。

俳句を通じて、多くの方々にご縁を頂き、感謝の日々を過ごしていきたいと思っています。

宮永武彦　プロフィール
一九七六年東京都生まれ。神奈川県茅ケ崎市在住。二〇一七年より「形象」で俳句を始め、現在「形象」、「天晴」同人。神奈川現俳インターネット句会担当。

秋の一句

もう秋か夜半の雨を聴きながら　中山　妙子
ゆく秋や心は流浪の民となり　永井　良和
ひとすじの月光を待つ暗き湖　安藤　靖
やや高いカフェの腰掛け赤い羽根　日置　正次
静けさの深き青空草雲雀　内田ゆり子
ねこじゃらし気のない返事まっている　町野　敦子



ひたち海浜公園のコスモス
（撮影：村上裕也）

稲妻や忘れゐしこと思ひ出し　廣﨑　龍哉
盂蘭盆会老二人ゆく日照り雨　石鎚　優
小鳥来る分校跡の投句箱　八木　和子
朝顔や赤青と咲き朝未だき　大山　賢太
やっと来てついと立ち去る秋の声　金栗トモ子

＝地区動向・消息＝

1. 6月19日（月）拡大幹事会　36名出席
ブロックの廃止に伴う各句会の名称変更
それの伴う規約改正について
各部の業務分担の見直し
拡大会議への交通費補助について
第40回俳句大会について等

2. 6月29日（木）川崎ブロック吟行会
40名参加

3. 8月21日（月）副会長会議　規約改正案、次年度の人事ほか

4. 9月12日（火）拡大幹事会
俳句大会について、規約改正の承認等

5. 新会員紹介
中澤　柚果　秦野市

6. 新会友紹介
荒　里依子　川崎市麻生区
津川　聖子　横浜市保土ケ谷区
野口美穂子　藤沢市
鶴田　静枝　相模原市
中村まさえ　茅ヶ崎市
柳　蒼柳　藤沢市
清水美津子　横浜市保土ケ谷区
川野ちくさ　横浜市南区

7. 会員動静
吉田　典子　横浜市磯子区（埼玉県より転入）

《編集後記》
◎川崎ブロックの六月吟行会の句会報告を一面で紹介しました。10月23日には丹沢句会の、12月1日には湘南サンシャイン句会の吟行会があります。皆様奮ってご参加ください。
◎会報162号では「冬の一句」を募集します。編集人までご投句ください。10月20日締切です。

発行所　神奈川県現代俳句協会
発行人　尾崎　竹詩
編集人　杉　美春
〒252・0325
相模原市南区新磯野4-4-1-506
電話　090・6534・1452
Eメール　miharusugi@jcom.home.ne.jp
事務局　芳賀　陽子
電話　046・865・4307
Eメール　yk.haga@w3.dion.ne.jp
印刷所　㈲湘南グッド